

注意点1

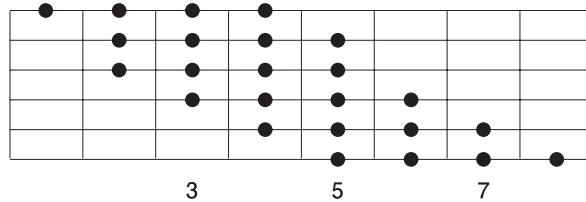


理論

半音ずつ音が並ぶ
クロマティック・スケール

まずは、このメイン・フレーズで使用しているクロマティック・スケールについて解説しよう。クロマティック・スケールはインターバル【註】がすべて半音になっているスケールのことで（図1）、バックのコードに対してテンション・ノートが自然に絡んでくるため、ジャズやフュージョンなどで使われることが多いようだ。ただ、メタル界でもシーケンシャルなプレイを得意とするドリーム・シアターなどのテクニカル系バンドが使用することもある。したがって、クロマティック・スケールはメタル系ギタリストにとっても必要なスケールと言えるので、食わず嫌いをせずに、必ず頭と指に叩き込んでおいてもらいたい。

図1 クロマティック・スケールのポジション例（1本弦に4音配置）



すべての音が半音の間隔で並んでいる。

注意点2



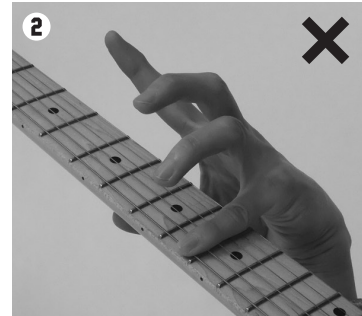
左手

小指の押弦時に
ほかの指が離弦しないこと！

このメイン・フレーズでは左手小指を多用するため、正しい押弦フォームで演奏しないと、途中でフィンガリングが崩れやすい。特に1小節目2拍目2音目の6弦8フレットのように人差指から小指を順番に押さえている状態では、左指すべてがフレットを押さえているように心掛けよう（写真①）。この時、小指以外の指が離弦していると（写真②）、指に無駄な力が入ってしまいフィンガリングの高速化を図ることができず、さらにすぐ疲れてしまうという悪循環にも陥ってしまうのだ。押弦の基本フォームを指に叩き込むためにも、まずはゆっくりとしたテンポで練習を始めよう！



① 小指による6弦8fの押弦時。人差指から小指までの4本の指が各フレットを押さえている状態を目指そう！



② 6弦8fを小指で押弦できたとしても、人差指から薬指が離弦していると動きに無駄が増えるので注意！

注意点3



理論

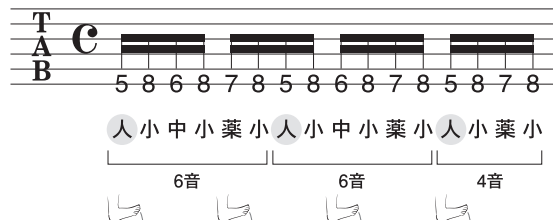
フレーズの区切りを覚えて
リズムを正確に取ろう！

このメイン・フレーズは、16分音符で“6音・6音・4音”という区切りで構成されている。このような6音区切りを主体にしたパターンを弾くことに慣れていないと、誤って6連符を弾いてしまうことがあるので、カウントを1拍（4分）ずつ取るようにしよう（図2）。また、フレーズの区切り（始点）となる人差指は、毎回しっかり押弦して、フレーズの軸となっていることを意識すると良い。例えば1小節目では、1弦5フレットを人差指で押弦し続けた方がフィンガリングの無駄が少なく感じられるが、人差指はフレーズの区切りになるので、毎回離弦／押弦を行なった方がリズムが取りやすいのだ。細かいポイントだが、覚えておいてほしい。

図2 メイン・フレーズの音の区切り

・1小節目

■ ▼ ■ ▼ simile ~



人差指(6弦5フレット)を始点にして、
1小節が6音・6音・4音という区切りになる。

【インターバル】2つの音の高さの差を表す（音程）のことで、ディグリー（度数）と言う単位で示す。“度”という文字を見ると、頭がフリーズしてしまう理論嫌いのギタリストも少なくないと思うが、ぜひ覚えてもらいたい基礎知識だ。